＜博士論文要旨＞

日本語と韓国語における可能表現の意味・用法

― 可能形式を述語とする可能文を中心に ―

言語社会研究科第2部門
LD082002　　高　恩淑

本研究では，日本語と韓国語の可能表現の対照研究のための基盤作りとして，可能形式を述語とする日本語と韓国語の可能表現の用例を詳しく取り上げ，その意味，用法と構文的な特徴について考察を行った。本研究は，11章から構成され，大きく４部に分かれている。その概要を簡単に説明すると次のようである。

第1部（第1章）では，主に先行研究を用いて日本語と韓国語における可能表現について概観した。まず，可能表現とは何かについて定義し，現代の日本語と韓国語における可能形式を整理した。次に，可能表現の形態的・語彙的な性格について述べた。最後に両言語の可能表現に関する先行研究を取り上げ，どのような点に注目して研究が行われているか，何が明らかとなり，残された課題は何かを説明した。

第2部の第2章と第3章では，現代日本語の可能表現において残されている問題を明らかにした。従来の研究では一般的に意志的な動作を表す動詞，すなわち意志動詞だけが可能形式をとるとしてきたが，何を基準にどこまでを意志動詞と捉えるかについては必ずしも明確でないところがある。第２章では，実例に基づき，332の基本動詞と「主体の意志表現形式」との共起関係を基準に「動詞の意志性」を測り，可能形式との関わりについて考察を試みた。その結果，「意志動詞」には主体の意志による動作生起から達成までのコントロールが可能な動詞に限らず，達成までのコントロールができなくても動作生起や変化を起こし得る動詞が含まれることを明らかにした。これにより，「動詞の意志性」は基本的に可能形式と連動しており，可能文に用いられる動詞は有情物主体の意志動詞に限られるということが裏付けられる。稀に，無意志動詞に構文上の制約が弱い可能形式「（スル）コトガデキル」が付くこともあるが，これは主に話し手の願望を表す表現が可能な動詞に限られる現象で，事態実現への期待が可能形式との共起に繋がるからである。

第3章では，日本語における可能表現の意味分類について考察した。まず「実現可能性の在り処」を基準に可能動詞を述語とする可能表現（実例数2905）の意味・構造的な類型を立てた。次に，それを支えている構文的な特徴を明らかにしながら，各タイプがどのような≪可能≫の意味を表すかについて考察を行った。その結果，可能表現の文

の意味はきれいに《潜在可能》か《実現可能》かという二種類の可能表現に分けられるのではなく，《潜在可能》から《実現可能》への移行関係を表すタイプが存在することがわかった。そして，どのような構文的な特徴のもとで二種類の可能表現の意味が表れやすくなり，相互に近づいていくかが明らかになった。また，第3章では可能表現の意味と述語に表されるテンスの形との結びつきは否定できないが，可能表現の意味は文の表す事態や時間性との関わりにより，方向付けられるものであることを明らかにした。

第3部に当たる第4章から第7章においては，可能表現の日韓対照研究の準備的考察として，韓国語の可能表現の意味特徴とその用法について考察を行った。韓国語の可能表現は，大きく「形態的な可能形式」と「語彙的な可能形式」に分けられるが，まず，第4章では，日本語の可能表現を手掛かりとしながら，韓国語の「形態的な可能形式」の意味特徴とその用法を取り上げた。「可能の生起条件」の違いに注目し，可能表現の意味を大きく「能力可能」と「状況可能」に分けて，韓国語の可能形式「ha-l swu issta / epsta」「ha-l cwul alta / moluta」「moshata / ha-ci moshata」の間の意味，用法の違いや重なりについて考察した。そして，韓国語の可能表現は日本語の可能表現と違って，「可能の生起条件」や「出来事の種類」（「ポテンシャル」か「アクチュアル」か）によって異なる可能形式が用いられることを明らかにした。

次の第5章では韓国語の「形態的な可能形式」の中で，代表的な可能形式である「ha-l swu issta / epsta」の用法を取り上げ，その意味特徴とそれらがどのような構造的な特徴によって支えられているかを明確に示した。可能表現において「動作主の能力を表す可能」と，「事態生起における蓋然性を表す可能」とは別の意味合いを成すという考えから，「ha-l swu issta / epsta」を大きく＜ちからの可能＞と＜蓋然性の可能＞に分けて考察を試みた。また，日本語において蓋然性を表す可能形式「（シ）得る / 得ない」との比較も簡単に行った。その結果，「ha-l swu issta / epsta」を用いる＜ちからの可能＞は有情物動作主で意志動詞を述語とするのに対し，＜蓋然性の可能＞は述語動詞が無意志動詞であれば，動作主の有無や動作主が有情物か否かは問題にならないことを明らかにした。また，日本語の「（シ）得る / 得ない」との比較においては，「ha-l swu issta / epsta」と「（シ）得る / 得ない」は，蓋然性を表す可能形式である点で共通しているが，「ha-l swu issta / epsta」に比べて日本語の「（シ）得る / 得ない」の方が文法的な制限が多いことを明確にした。

第 6 章と第 7 章では，韓国語の可能表現の「語彙的な可能形式」“-cita”と“toyta”について考察した。受身や状態変化を表す際に多く用いられる“-cita”と“toyta”は，使用場面が限られていて生産的な形式とは言えないが，意味的な面において可能表現の意味を担っている。よって，本研究ではこれらを「語彙的な可能形式」と捉え，それぞれ第 6 章と第 7 章で考察を行った。

まず第6章では，従来の研究において受動形式の一つとして扱われることが多い補助動詞“-cita”を取り上げ，≪可能≫と≪自発≫の用法に焦点を当て，その意味特徴と構

文的な特徴について述べた。そして，補助動詞“-cita”を用いる文には≪受動≫に限らず，≪可能≫や≪自発≫を表す場合があり，文の表す意味や構造的な特徴が異なるため，これらをまとめて受動表現とする考えには無理があることを明らかにした。また，従来の研究で主に受動形式として扱われてきた“-cita”が≪可能≫や≪自発≫の意味を表す点から，日本語の受身と可能，自発が同じ根から発しているように韓国語も≪受動≫と≪可能≫，≪自発≫が相関性を持っていることを指摘した。

第7章では，韓国語の文法研究において“-cita”と共に受動形式を表す際に多く用いられる“toyta”を取り上げ，その用法と意味特徴について考察した。これまでの韓国語の文法研究においてほとんど取り上げられることがなかったが，“toyta”は“-cita”と共に意味的な面において≪可能≫の意味を担うことがある。第7章ではその裏付けとして“toyta”の用法を詳しく取り上げ，その意味特徴を明らかにすることで，“toyta”が補助動詞“-cita”と共に韓国語の可能表現において「語彙的な可能形式」の一つとして捉えられることを指摘した。

第4部に当たる第8章と第9章では，現代の日本語と韓国語における可能表現の対照分析を行った。韓国語の可能表現を日本語の可能表現と照らせ合わせながら述語において生じる可能形式のズレについて考察した。まず，第8章では現代日本語の否定文において継続相非過去形が用いられる場合，構文上において可能文と無標の動詞文の区別がなくなることに着眼し，韓国語との対照を試みた。その結果，日本語において＜未完結＞表す場合，継続相非過去形が用いられるため，動作がまだ終わっていないという「未生起」に重点が置かれ，その原因はあまり問題にならないが，韓国語の場合，完了相過去形が用いられることで，動作が結局終わらなかったという結果に対するその原因に重点が置かれるようになり，動作主の意図通りにならない「非実現」なのか，それともそもそも動作主に実現への意図がない「不実行」であるかを示す必要が生じるということを明らかにした。

次の第9章では，現代の日本語と韓国語の述語における可能形式のズレについて《実現可能》を中心に考察を行った。韓国語では事態の実現を表す肯定文の場合，「動作主が単に動作を完了した」状況も，「動作主が期待する，もしくは意図して実現した」状況も結果だけに焦点を当てて考えると同じ出来事として捉えられるために可能形式が用いられない。一方，否定文の場合，「動作主が意図して動作を実現しなかった」状況＝不実行と「動作主の期待や意図通りに動作が実現しなかった」状況＝非実現が異なる出来事であるために，両者は異なる述語形式で表される。従って，同じく事態実現の結果だけが重んじられる《実現可能》でも，「事態の非実現」を表す否定文は，日本語と同様に韓国語も可能形式が用いられるといった結果が得られた。

以上のように，本研究では可能形式を述語とする可能文を中心に現代の日本語と韓国語における可能表現の意味・用法について考察を行った。

現代日本語の可能表現において，一般に可能形式は意志性を持つ動詞，すなわち意志

動詞でなければならないと指摘されてきたが，「動詞の意志性」と可能形式との関わりを正面から扱い，その関連性を明らかにした研究はほとんどない。また，これまで現代日本語の可能表現に関する研究は多く成されてきたが，可能表現の表す意味とそれを支える構造を結びつけて研究したものは少ない。本研究の考察により，これらの研究課題が明らになったことで，日本語と韓国語の可能表現に関する対照研究が行われやすくなると期待できる。

一方，これまで韓国語研究において，可能表現は文法的・意味的なカテゴリーとして明確に取り出されておらず，輪郭があいまいであったが，本研究の考察により，韓国語の可能表現において文法的な形式，意味，用法が明確に取り出せるようになった。これにより，韓国語母語話者に対する日本語教育，日本語母語話者に対する韓国語教育で活用できる可能表現の体系を作り上げるための準備的考察ができたと言える。

本研究における学術的な意義は，日本語と韓国語の可能表現に関する対照研究の基盤作りができたことにある。